

Deus Quatenus の哲学

―スピノザ解釈をめぐる石沢要先生と田辺との接点―

井上 克人

序 田辺との出会い

石沢要先生（一九〇四―一九九一）は、田辺元の遺志を継いで北條井沢の山荘と群馬大学に寄贈された大部の蔵書の管理と運営に尽力され、「群馬大学求真会」（後に「求真会」）の設立に寄与されたことで夙に知られているが、学問研究としては、生涯をスピノザ研究に打ち込まれ、独自の Deus quatenus 論を展開された。先生が田辺の嚆矢に接することができたのは、田辺の最晩年の五年間に過ぎなかったが、スピノザ研究に決定的方向をとるよう導かれたのは、昭和三五年一月に田辺から送られてきた次の三通の手紙であった。

「若しスピノザがユダヤ教の有神論ではなく、禪の絶対無論に育ちましたなら、衆生の仏性、その自覚、頓悟即作仏なる弁証法は全くデウス クワテナスに合すると思われます。デウス クワテナスという自覚はまさに禪の悟道以外のものではありませんま

い。」（一月一〇日付）「エックハルト・禪・真宗の三一性よりもむしろエックハルト・禪・スピノザの三一性の方が自然ではありませんまいか。小生、今や敢てデウス クワテナス、即ち（限りの神）を唱導しようという自信を得ました。」（一月二二日付）「スピノザの神が単に直接的に無媒介なる絶対的実体を意味するものではなく、同時に個物としての様態の無限なる統体に媒介せられたる（限りの神）を意味するものなることを知り、小生の下降的、上昇的の二途が相交叉して、相互に循環的渦流を形成するという解釈を確かめました思いを懐きました。」（一月一七日付）

若い頃から学行一如を貫かれていた石沢先生にとって、禪の体験に基づいてスピノザを読むようにという田辺からの教示は、ここに Deus quatenus の自覚という形に明確化される。以下では、石沢先生の『スピノザ研究』（昭和五二年刊）に収載されている二つの論文に依拠しながら、先生のスピノザ解釈に添って論述し、適宜、筆者による評釈を加えるという仕方でも論を進めていきたい。

石沢先生のスピノザ論（二つの論文より）

（一）「スピノザにおける Deus quatenus―固有思想とカバラ」

Deus quatenus（限りにおける神）とは、古いカバラの謎の言

業であり、流出論的汎神論の原理である。この原理は「カバラの再興者」スピノザの固有思想として初期の『対話』『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』（以下『短論文』と略記。因みに『対話』とは、この『短論文』中に挿入されている第一対話と第二対話からなる二つの対話のことである。）から後期の『エチカ』を通じて一貫して存しており、それは一者と様態、神と人間、実体と様態の汎神論的規定の上に明らかに認められる。以下では次の順序で論じられる。

- (1) 一者と方法の関係 (2) カバラの *Deus quatenus* の意義
- (3) スピノザへの展開
- (1) 一者と方法の関係

(一者)とは次のような特質をもつ。①自分自身によって存在し、他のあらゆる属性の保持者であるところの唯一者、②何ものによっても限定されない最高完全の実有、③最高完全の実有としての神はそれ自身無限である限りにおいて、④かかる一は数量を越えた一であり、最高の完全性をあらわす。

このような無限唯一実体である一者が、方法を包括する根拠をなし、方法はこの一者の限定されたものとして、一者の「変状」であり一時的な様態存在にすぎない。従って、一者は超越的存在であると同時に方法を包括しその中に内在する仕方で顕現しているのであって、その意味で神は超越的原因ではなく内在的原因で

してしかも一者は流出し尽くすことがないという考えは、カバラでは、神は形態を持つと共に形態を持たないというふうに表示される。ところで、一であると共に多であるとか、形態を持つと共に形態を持たないという矛盾を、カバラでは、*quatenus* という呪文を用いることによって神秘主義的に解決している。即ちカバラ的汎神論の特色はかかる呪文として *quatenus* をその原理として用いるところにある。*quatenus* は神の属性の変状の機をあらわすものであるから、その本来の意味は *Deus quatenus* である。また *quatenus* は *Ensof* (無限の無) との関係で考えられる時には *Deus und deus quatenus* である。

だが、カバラにおいて *Deus quatenus* はどのように用いられているのか。カバラ学者ヘンラの『天国の門』という著書の中に次のような箇所がある。

ただ一実体のみが無限なる性質をもつて存在する。そして多くの有限的存在に自己限定する。神は一であり多である。

神 (*Gott*) はそれ自身無限である限りにおいて (*insofern*) 一であり、神 (*Gott*) はその限定の仕方でも自己限定する限り

において (*insofern*) 多である。多はその中にある神的一者なしには存在し得ず理解もされぬ。すべては神において一

である。 (Borkowski, Der Junge De Spinoza, S.189)

ある。つまり、一者に視点をおけば、一者は方法として無限多様に顕現しつつしかも一に止まるということ、一でありながら無限多様の多を統一するということである。逆に、方法に視点をおけば、方法は相互に無関係に孤立した多ではなくて、無限多様な変状を呈しつつも、一者によって一つに統べられて重々無尽に相関し合っている。つまり多次元的に無限に相関しつつ一者に帰している。

(2) カバラの *Deus quatenus* の意義

以上は汎神論の一般的規定だが、カバラ的汎神論はプロチノスに系譜をひく流出的汎神論である。プロチノスによれば、一者はあたかも光体の如く、それ自身光体であることをやめずに光線を放ち、その光線が闇の中に自ら消え失せていくように、あらゆる存在がたえず下降する段階をなして一者から流れ出ていて、しかも一者はそれ自体流出し尽くすことがない。一者は方法に内在しながら、しかもそれ自身は方法を超越しているのである。これによって、一者は方法に顕現し、方法は一者に帰するということ一者即方法、方法即一者という汎神論的關係が成り立つ。言い換えれば、一者と方法の關係が(流出)と(復帰)という形式であらわされる(1・43)

さて、かかるプロチノスの流出論、とくに一切が一者から流出

ここで留意すべきは、神の一と多の二側面を二つの *insofern* によってあらわされている点である。(1・46)要するに *insofern* 「限りの」には相連関し合う以下(a)(b)の二重性があるのである。

(a) それ自身無限である限りにおける一

神は方法をして方法たらしめるものとして一者であり、それ自身限定されないこと、無限であるということによって、方法を統一しうるのである。神はそれ自身無限である限りにおいて (*insofern*) 方法を包括し、統一する一者たるのであり、神は無限であるが故に、無限多様の様態が一者として顕現しつつあるのである。二つに用いられている *insofern* は無限である限りの神の *insofern* を意味するものとして、一者即方法の即をあらわしていると考えられる。(1・46)

【評釈】石沢先生は、この一の消息を「一者即方法の即をあらわしている」と説明されるが、この説明は幾分混乱を生じさせる。

ここでは一者が変状せる様態としての方法へと自ら顕現しつつも、それ自身は二つまでも一なるものとして止まるということ、つまり「無限である限りの」とはその超越性の特質を述べているので、

この場合の *insofern* は、方法への顕現の側面を示す「一者即方法の即」というよりは、それ自身包括されるものとはならない超越的、一である限りの、という意味で、「一者即一者の即」として捉える

(b) 自己限定する限りにおける一(一即多・多即一) 神はその限定の仕方でも自己限定する限りにおいて (insofern) 多である。万法が個物的多として無尽に相關しながらその各々はその所得るように、神がその限定の仕方でも自己限定する。個物的多は無限多様に分かれながらも全体的に一に統べられるように、多即一として万法が一者に帰するのである。一者に帰一するという仕方でも、万法は無尽に相關しているのである。(同頁)

【評釈】以上のことからわかるように(a)が「一者即一者」として、一なるものの超越性を示すのに対し、この場合の insofernこそ、石沢先生の言葉で言えば、「一者即万法、万法即一者」であらう。

以上のように、『天国の門』における insofern は、神が無限である限りにおいて (insofern) と、その限定の仕方でも自己限定する限りにおいて (insofern) という二重の限り方において一者と万法の互換円融をあらわしている。Deus quatenus とはい、流出と復帰というのはいずれも一者即万法、万法即一者の互換円融をあらわしている。(1・47)

しかしこの『天国の門』の Deus quatenus では未だ一者と万法の互換円融そのものの成立根拠が示されていない。これを判然と

取り出して示しているのはカバラの『光耀篇』である。その思想の基調となっているのは、「無限の無 (Ensofph)」である。スピノザは『光耀篇』をよく読んでおり、この中の無限なるものがあらゆる認識しうるものの彼方にひろがっているという思想に満足していたという。この無限の無が一者即万法、万法即一者の互換円融そのものの根拠となるものと解せられる。『光耀篇』の次の文の中では「形態を欠く」という言葉でこれをあらわしている。

神は世界を超えている。併し神はまた世界の外にあるのではない。神は形態を持つと共に形態を持たない。神 (Gott) は宇宙と関係する限りにおいて (insofern) 形態を持つのであって、神 (Gott) は世界の中に包括されぬ限りにおいて (insofern) 形態を持たない。(Ebensda, S.187)

形態を欠くというのは、神が形態の根拠をなしており、すべての形態を包含し、すべての形態がそこから出てくることを可能にするようなものとして形態を欠くのである。このように形態を欠くことが積極的意味をあらわしているのは「すべての限定は否定なり」の命題である。これは形態は限定であり、絶対無限の実有の否定ということをあらわしている。形態あるものは形態を欠くものの限定されたものにすぎない。形態なきもの、限定されないものこそ却って根源的なものである。

カバラにおける「隠されたる神 (Deus absconditus)」というのにかかる形態を欠く神をあらわしている。隠されたる神は形態を欠くものとして「永遠に基礎づけられず、その本質の深みに、無の深淵の中にやすらっているのである。この隠されたる神には特別な属性はない」(Scholem, G., *Die jüdische Mystik*, S.14)。形態がないということと特別な属性がないとごうのは、同じ意味に解することができるであらう。(1・48—49)

カバラ学者アスリールは、この隠されたる神について、その著『問答による十のセフィロートの説明』の中で次のように述べている。

神は無限なるもの、無限の無として中心点をなす。知性もなく、意志もなく、風性もなく活動性もない。無限定的無限である。神はすべてを包含する。何物も神の完全性を奪わない。無限の無は無限に存在するからして、神はすべての有限なるものを表現することができなければならない。しかし神の無限を害することなしに、如何にして無限なる力が有限なるものを産出することができるのか。それは神が自己自身を制限するために、自己の無限の力を呼び出すことによってのみ可能である。(Borkowski, *Der Junge De Spinoza*, S.183)。(1・49)

ここには先の『光耀篇』の「神は形態をもつと共に形態をもたない」機微が述べられている。そしてこれがカバラの謎の言葉 quatenus が Ensofph と不可分に結びついている所以である。すなわち神が自己自身を制限するために、自己の無限の力を呼び出すことによって、無限なる者から有限なるものを産出することを Deus quatenus というのである。これを要約すれば、一者即万法、万法即一者の(理)を根源的にあらわしているのが Deus quatenus であるということができる。このような意味で、アスリールも quatenus を無限の無の理論及び原始存在としての神の流出論の中で用いているのである。(1・49—50)

【評釈】少し敷衍して説明したい。先述した、「無限である限りの神」と「自己限定する限りの神」とを区別し、前者を「Deus quatenus A」、後者を「Deus quatenus B」と仮に呼び出すれば、Ensofph と不可分に結びついた quatenus は「Deus quatenus A」であって、これこそが一者即万法、万法即一者の互換円融を可能ならしめる究極的・根源的根拠、すなわち「理」ということになろう。すなわち、一者たる神は流出し尽くすことがないものとして、或いは一切を形態化しつつもそれ自身は形態化されることなくそれらを統一的に包括するものとして、自己自身へ超越的に「一者即一者」として立ち返っている、言い換えれば、自己自身の内

「翻っていると言えようか。それが『Deus quatenus A』の quatenus の意味である。

さて、石沢先生はカバラ的汎神論の特色を次のようにまとめられる。「神は一であり多である」という時、それは一者即方法、方法即一者の互換円融をあらわしており、他方、「神は形態なくして形態をもつ」という時、一者即方法、方法即一者の〈理〉をあらわして、Deus quatenus (Gott, insofern) はこのようなカバラ的汎神論の原理をあらわしていると考えることができると。(I・50)

ところで、石沢先生はアスリールの文章を紹介し、そこで「神が自己自身を制限するために、自己の無限の力を呼び出すことによってのみ可能である」という文章に着目し、それを更に『光輝篇』の形態なくして形態をもつ「機微」と共通するといひ、Ensofh (無限の無) という語に着目するのだが、じつはこれは、カバラの「神の自己収縮(ツィムツーム)」のことなのである。それについて、少し紹介しておきたい。

G. ショーレムは「無からの創造と神の自己限定」(市川裕訳)のなかで、大略次のように説明している。(G・ショーレム「無からの創造と神の自己限定」(市川裕訳)(A・ポルトマン、G・シヨールム、H・コルバン著(日本語版監修:井筒俊彦、上田閑照、

とができる。神が「自分自身から自分自身へ」退くときのみ、神は、神の本質でも神の存在でもないものをもたらしることができる。したがって、この意味で、神が自分自身からなにかを収縮させる行為が存在する。このように神が自分の最初の行為を外に向かって行わず、むしろ自分自身の内に向けて行った、かの神の本質の自己限定において、無が姿を現わすのである。ここに我々は、無が出現する行為を持つのである(102—104)。こうして、創造とは、確かに各段階における発出であり放射なのであるが、同時にそれは、各段階においてつねに改められ、絶えず繰り返される神の自己への集中、神の自己への退出でもある。(87—88)

石沢先生は、カバラの「形態なくして形態をもつ」機微、その「形態を欠く」という一者の特質を執拗なまでに強調され、恐らく Borkowski, *Der Junge De Spinoza*, を介してのことだろうが、上記のアスリールの文章や Ensofh への着目が目立つ。しかしもし石沢先生が、同じカバラの「神の自己収縮(ツィムツーム)」を「存知であったならば、きっとこれを紹介されたことは疑いないと確信できる。

さて、以下で、石沢先生はこうしたカバラ的汎神論がスピノザ哲学の中にどのように受容され展開されているかを、『対話』『短

河合準雄)『なるものと多なるもの』エラノス会編。桂秀樹、市川裕、神谷幹夫訳、所収。一九九一年、平凡社)本文中括弧内の数字は本書の頁数を示す。)

スコトッス・エリウゲナ(八七〇年頃)の著者『自然の区分について』によれば、万物の本来の始原とは、そこにおいて事物がその原型から展開されるところだが、神が事物の本来の始原へと下降することは、神自身の本来の無、そこからすべてが出現する無へと下降することである。この神が自身の本来の深みへと下降する原創造の行為は、この神の内部の活動性と活力を巨大な逆説的な姿で示しており、無からの創造とは、簡潔に云えば、神が始原において自身を創造する過程である。

後期のカバラ神秘家の場合も同ような発想をもつ。

それはイツハーク・ルーリアと彼の弟子たちが説いた「神の自己収縮(ツィムツーム)」という考えである。「ツィムツーム」とはヘブライ語で、字義どおりには「収縮」を意味する。ここでは、その表現によって、神の本質の自己集中が意味されている。それは、すなわち神自身が深淵へと下降すること、神の本質の自己限定であり、神の本質は、この理解の仕方によってのみ、無からの創造が起こるときその内容を描くこ

論文』『エチカ』の順にしたがって見ていくのだが、本稿では字幅の制約もあつて、『対話』は省略する。

(3) スピノザへの展開

スピノザは『短論文』の中で、一者が方法に顕現し、方法が一者に復帰する「転換の理」を「規則」としてあらわしている。この「規則」をスピノザは第二部序言において、人間を一つの実体ではないことから導き出す。即ち彼にとって人間は実体ではなく様態であつて、人間をも含めて万有は実体の変状としての様態なのである。様態たる方法は唯一実体たる神によって根拠づけられて存在しており、方法帰一という基本的な洞察を確信しながら、しかもその一なるものが如何にして方法の上に実現するかということこそ、スピノザにとつては問題であつた。さて、『短論文』において立てた「規則」は次のようなものである。

「それがなければ或る物が存在することも理解されることも出来ないやうなものがその或る物の本性に属する」といふだけではなく、この命題が常に転換され得るやうでなければならぬ、即ち逆に、「その方もその或る物がなければ存在することとも理解されることも出来ない」と言つたやうでなければならぬ。」(富中尚志訳『短論文』(岩波文庫、一一二頁)

石沢先生の示唆によれば、ここで「それ」とは人間をも含めて万

有の婦すべきものとしての一者であつて、この規則で重要な点は、この命題が常に逆に転換されうるようであればならぬと説いていることである。即ち「規則」のこの箇所で神人合一思想が内容として展開されており、この転換の規則の意義は重視されるべきであると言ふ。(I・61)ところで留意しておくべき点は、以後の説明では石沢先生はとくに、一者と方法との関係において、方法を特に人間に限り、神と人間との関係に着目の度合いが濃厚になつていくということである。

(i) 規則の前半・・・二者即方法

或る物は一者の顕現としての様態であるが故に、一者がなければ存在することも理解されることも出来ず、またすべて在る物は一者たる神の中にあるのであるから、神においてすべての物が無尽に相関している。つまり神がなければこの相関は成立しないのであつて、すべての物は神において相関し、神において統べられている。

(ii) 規則の後半・・・「方法即一者」

一者がなければ方法も成立しないが、しかしこの一者も方法において在り、方法において考えられるのである。方法が一者に復帰することによつて一者は一者たりうるのである。方法は重々無尽に相関しつつ事々無礙的に展開しているのだが、その展開にお

いて一者はよく一者たりうるのである。そしてあらゆる事物が神にまで合一しているこの関係は、そのまま神と人との合一にもあてはまる。(I・63—64)

従つて、『短論文』における神人合一は、無媒介の合一ではなく「規則」の具体化としての一者即方法、方法即一者の意味において神人合一である。スピノザは言う。「人間は存在する一切物と共に神の中に在り、又神はこれら一切物から成立し、・・・一切は唯一の物即ち神そのものを形成してゐる」(同上二九七頁)。

神は人間をも含めて一切物を成立せしめると共に、神そのものも人間を含めて一切物から成立している。これを神人合一として神と人との関係についていえば人は神の中にあり、神がなければ存在することも理解することもできない。それほど神にしかと依存している。また神は一切から成立している。一切物が神そのものを形成している。そしてその形式たるや、一切物はその分に依りて、完全なる事実の成就に寄与するように、秩序づけられている。

その秩序づけられ方は一切物に即してみれば事事無礙的という仕方においてである。人が神そのものを形成するという場合もこれと少しも変わらない。人が神に合一するのは、人間の分に依りて完全なる事実の成就に寄与するような仕方であつて合一するのである。

(I・65、傍点、筆者)

【評釈】補足すれば、ここには田辺の絶対転換の弁証法が明確に読み取れる。相対は絶対と無媒介的に合一するのではなく、絶対が対を絶するものとしてどこまでも絶対たりうるのは、相対が絶対への方向ではなく、相対がどこまでも一分に応じる仕方であることである。相対相互の交互媒介の行為においてはじめて絶対と対を絶する仕方であつて絶対との交互媒介が成り立つのである。

石沢先生は次のように説明を続ける。神人合一とは、このように神と人と転換しうる関係であり、神にしかと依存しておりながら、その分身として神の成就に寄与しうる関係である。しかし有限なる人間が神認識にまで向上し、神と一体になることができるのは、人間の認識そのものによるのではなく、むしろ神によつてそうなるのである。また如何に人間が神に迫るとしても神にはなれない。神は依然として神であり、絶対無限の実有である。神に合一することによつて、却つて自身の有限なることが明らかとなる。神人合一でありながら、神は神、人は人である。それでいてそこに神が人となり、人が神になるという無差別の差別という矛盾した関係が成り立つ。この神人転換の事実を認め、規則として打ち出したのが先に挙げた「規則」における二命題の転換ということである。(I・67)

次に先生は冒頭に挙げた田辺の手紙の示唆に従つてエックハルトに言及され、以下のように論じる。この神人転換の事実はエックハルトの「神の人を見る目は、人の神を見る目と同じ」というのに相通するものがある。「神の人を見る目」というのは、一者たる神が様態たる人にあらわれると解することができる。このとき人は有限でありながら無限の中に吸収され、有限性から永遠性に転ずることによつて神の一部分となり、自己が真の自己となるのであつて、ここに転換が生じる。即ち神の人を見る目は、人が神を見る目と転換される。人は真に人たることによつて神を見、神の完全性の成就に寄与するのである。神が人に顕現することが、そのまま人が神の完全性の成就の寄与となる。これを神の下降と人の上昇の転換と見ることが出来る。しかしそれは神の下降、神の人を見る目があればこそ人の神を見る目が成り立つように、人の上昇が行なわれる。人が上昇する原因としての神の下降である。

(I・68—69) こうした一者と方法の転換の規則、その具体化としての神人合一には、カバラの *Deus quatenus* の形式こそ用いてはいないが、規則の二命題を逆に転換しうる場合には、*insofern* の形式と同じ意味内容が含意されている。(I・69)

では、次に『エチカ』ではカバラの汎神論をどのようにに反映させているか。本書の骨格となるのは巻頭の八つの哲学的定義であ

る。まず最初の定義は以下のように論じられている。

自己原因とは、本質が存在を包含するもの、即ちその本性が存在するとしか考えられ得ないもの、と解する。(畠中尚志 訳)

まず、筆者(評者)の考えから述べておきたい。ここで言われていることは、凡そ以下のようなことであろう。すなわち、神以外の万物は神が存在根拠、すなわちその存在の「原因」とするが、神自身はその存在に他の根拠・原因を必要とせず、自らが存在そのものであり原因そのものであるが故に「自己原因」と言われるのである。聖書の「出エジプト記」にあるように、神とは「ありてあるもの」であって、つまり存在することがそのものの本性になつてゐる。それを自己原因と呼んでいるのである。この自己原因である神と他の存在とが異なるのは、後者が存在しないことも可能であるのに、前者は、存在するとしか考えられない、必然的存在だということであつて(定理七七証明)、このような必然的存在が実体と言われるのである。「実体とは、それ自身において存在し、それ自身によつて考えられるものことである。言い換えれば、その概念を形成するために他のものの概念を必要としないものことである」(定義三)

このことからわかるように、この自己原因の定義はどこまでも

(1・72)

方法即一者として、一者は方法を包含して絶対無限的存在に留まつてゐるのではない。神は形態を欠くと共に形態をもつというカバラの『光耀篇』の思想を継承しているのが『エチカ』であるから、一者を絶対無限的存在とすることは、方法と離して別に考えることはできない。形態を欠くとは単に形態を欠くということではなく、形態なき形態ということである。即ち形態を欠くことは形態をもつことの根拠という意味をもつ。一者即方法として、一者は方法に顕現し形態をもつのである。その本質は存在を包含するが、その本性は存在するものとしてのみ理解される。それ自身において在り、それ自身によつて考えられるところの実体(本体)は方法を包含し、方法を超えて形態を欠くが、属性(用)を通して形態をもち、様態(相)となる。実体、属性、様態の関係は体・用・相の関係である。(1・73)

以上のことから、自己原因の定義を石沢先生は次のように解釈する。即ち「その本質は存在を包含する」という前半の命題が方法即一者として、実体の無形態性をあらわすとすれば、「その本性は存在するものとしてのみ理解される」という後半の命題は、一者即方法として実体の変状、様態の形態性をあらわして、ここにおいて二つの命題を give によつて結ぶということが一者と万

実体たる神そのものの存在に本性を述べたものであつて、後半の「その本性が存在するとしか考えられないもの」というのは、定義六の神の定義にもある「絶対に無限なる実有」といわれる場合の「実有」のことを謂つており、つまりここにはまだ神の様態としての方法およびその関係についてはまったく触れていない。

しかるに石沢先生はこの定義のなかの「即ち(即ち)」に着目し、これを先に言及した『短論文』の「規則」における二命題の転換の意味に対応するとして強引に解釈し、汎神論的に全即一、一即全の「即」と同じであつて、要するに自己原因の定義とは、方法が一に帰し、その一が方法に顕現するその転換の機を動的にあらわしているとする。(1・71) すなわち、汎神論的に解すれば、「本質が存在を包含する」とは、方法が一に帰することであり、いずれのところにか帰すといえ、その本性が存在するものとしてのみ理解されるとして、方法の上に顕現するの他ない、という。要するに「本質が存在を包含する」という時の存在は、「様態」の存在と解すべきであり、この様態の存在は持続存在として有限であつて、この有限性を超えることはありえないとされる。しかしこの有限的存在を包含しうる本質は、これを超えており、本質と存在が同じである実体においては、永遠存在である、と解されている。永遠存在とは形態なき形態ともいふべきものだと思われる。

法の転換の理をあらわすものと解せられる、と。

しかし、翻つて考えてみるに、石沢先生の説明は、「一者即方法、方法即一者」という二句一対で両者の互換円融を常に念頭におかれ、それを強調される視点に立脚されての解釈ではあるが、スピノザの「自己原因」の定義の解釈としては、いささか我田引水の嫌いなしとしない。さて、石沢先生は、さらに第六定義に着目する。

神とは、絶対に無限なる実有、換言すれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成つてゐる実体、と解する。説明 私は「自己の類において無限な」とは言わないで、「絶対に無限な」と言う。何故なら、単に自己の類においてのみ無限なものについては、我々は無限に多くの属性を否定することができる、換言すれば我々はそのものの本性に属しない無限に多くの属性を考へることが出来るが、これに反して、絶対に無限なものの本質には、本質を表現し、何らかの否定を包含せぬところのあらゆるものが属するからである。(『エチカ』第一部定義六)。

この神の定義の要点は絶対無限というところにあり、方法即一者、一者即方法の転換を可能にする根拠として絶対無限なるものが考えられており、この絶対無限において始めて一者と方法、実

体と様態の転換が可能になることが説かれている。さらに敷衍して言えば、ここにはカバラ的汎神論として「隠されたる神」、「無限の無 (Ensofh)」の思想が説かれているのと相通じるものがある。隠されたる神は形態を欠くが、顕現することによって形態をもつ。すべての形態は形態を欠くものの中にある。形態をして形態たらしめるが、しかもそれ自身には形態を欠くという意味において、隠されたる神は無限の無である。神は絶対無限の実有という時、スピノザはかかる隠されたる神を考え、形態なき形態として無限の無を考えているのである。(I・76—77)

一者が方法を包含するには、一者に限られてはならない。限られているものは、有限なるものを包含することはできない。それ自身もまた有限であるからである。有限であるものは、相互に規定しあう関係にはあるが、一方が他を包含するという関係はもたない。すべて有限なるものを包含しうるものは、それ自身無限である。一者は方法を包含するものとして、唯一無限であり、形なきものである。無限の無である。形なきものこそ、方法を包含し、方法をして方法たらしめる唯一無限にして、絶対無限の実有である。神は一切の形態を包含しながら、それ自身に形態を欠いているものである。

このように見てくればわかるように、八つの定義は何れも相互 Ensofh の概念の執拗なまでの使用に繋がったのではなからうか。

(II) 『スピノザに於ける Deus quatenus — 『エチカ』と弁証法』

この論文では、『エチカ』を近代的汎神論として合理主義的側面において開陳したものとみなし、Deus quatenus の弁証法的意義を判然とさせ、それが証上に方法をあらしめるところの個体的存在の原理であることを解明する。まず Deus quatenus について、それを否定的な意味に理解する立場、消極的に肯定する立場、そして最後にそれを積極的に肯定する立場があるとし、各諸説について順次、綿密な考察が展開されているが、ここでは、本稿のタイトルに即して、Deus quatenus を積極的に理解し、それを独自の弁証法的な解釈を施す田辺説のみの紹介に留めたい。勿論、こでも石沢先生の論述に従うことにする。

田辺は Deus quatenus を弁証法的原理を示すものとして捉えているが、それは次の三点に要約することができる。

(1) Deus quatenus は普遍にして個体なる具体的普遍の原理である。

(2) Quatenus としての限定に身体性を必要とし、これを媒介として思惟が Deus たるところを自覚するのであるから、延長と

に密接に関連しつつ、(二者即方法、方法即一者の転換の理) を明らかにしたものとすることができよう。(I・77)

ところで、石沢先生がここで強調したいことは、絶対無限なるものは「形態なきもの」、「無限の無」であって、それこそが、一者と方法との交互転換をはじめて可能にする根拠に他ならないという一事である。印象では、石沢先生は「形態なきもの」とか、「無限の無」を執拗に強調しながら、まだどこか言い足りぬところがあり、幾分もどかしい思いもあつたのではないか、と思えてならない。要するにそれはカバラの「隠されたる神」にも言及されているように、(自己を隠すもの) であること、一なるものが自己抑制的に自己自身へと翻り、自己自身を覆蔵する特質をもつものであること、それは言い換えれば先述のカバラの「ツィムツーム」に他ならず、道元の言葉を援用すれば自己自身へと「蔵身」するものだというものではなかったか。そうした意味でどこまでも超越的に一なるものだ、ということである。絶対無限なる一は、方法へと顕現しつつも、その顕現を可能にするために、一は「流出し尽くすことがない」仕方でその超越性を保持すべく、一自身へと翻り、自己隠蔽するのである。恐らく石沢先生はこうした絶対無限の機微を見て取っておられたに相違ない。そしてそのことが、「形態を欠くもの」という表現や「無限の無」、つまりカバラの

思惟とは弁証法的統一において実体を成立せしめ、絶対否定としての神の欠く能わざる二つの必要契機となる。

(3) 精神と身体との否定媒介の関係において相關的に考えると同時に、この物心の統一が成立する根拠として無限なる自己原因としての実体、すなわち神を直観し、この神の有限的に限定せられた限りのいわゆる「限りの神」Deus quatenus をもって個体と見做すのであるから、『エチカ』はまさに形而上学であり、しかも弁証法的媒介の立場に成立するものであったといわねばならぬ。いわば第一部から始まる降下道は、第五部の終りから向上する上昇道と出合い、上昇降下として循環的に過流を形づくるものといわねばならぬ。

田辺が Deus quatenus について触れているのはこの三つの説明であり、(1)、(2)は『個体的本質の弁証論』にあり、(3)は『マラルメ覚書』にある。つまり、田辺は Deus quatenus を上昇降下する循環的過流を形づくるものと見做し、そこに実体論と身心論とがその特徴を示すようになることを明らかにしている。(I・196—197)

石沢先生は田辺の説明に付き従うかたちで思索を展開させていく。『マラルメ覚書』の中で田辺は Deus quatenus について次の

ように言う。「神の有限的に限定せられた限りのいはゆる（限りの神）Deus quatenus (Ethica II, Def. 1)を以て個体と看做す」と。石沢先生によれば、これは一者即方法として神が個体に顕現していることについて述べていて、その顕現の仕方が神の有限的に限定せられた限りの「限りの神」というので、神からの下降が取り上げられている。しかしスピノザにおいては、神の下降と個物の上昇とは不可分なのであって「限りの神」としての個体は必ず個物の上昇の面を包含している。言い換えれば個物のコナトウスは神のポテンティアを理由としている。それを証拠だてるため、石沢先生は田辺の次の言葉を引用する。「精神と身体との否定媒介の関係において相関的に考へると同時に、この物心の統一が成立する根柢として、無限なる自己原因としての実体、すなわち神を、直観す。」

これは『エチカ』の第二部〜第五部の人間力学を要約したものであって、個物は上昇の極、神の有限的に限定せられた限りの神、すなわち神の下降にふれ合うことをさしているものである。個物の上昇と神の下降にふれ合うところ、限りの神Deus quatenus、すなわち個体たるのである。従ってここに規定されている個体は、神の有限的に限定せられた限りの神というに止まらず、個物の上昇と神の下降の相触れるところのDeus quatenusである。それは

スを道元禪のいわゆる「身心脱落・脱落身心」を以って解釈していく。彼はスピノザの、「我々の精神はそれ自ら及び身体を永遠の相の下に認識する限り、必然的に神の認識を有し、また自らが神の中に在り・神によって考えられることを知る」(第五部定理二十)を取り上げ、次のように説く。すなわち、この定理の前半は身心脱落をあらわし、後半は脱落身心をあらわす、と。身心を永遠の相の下に認識するところ身心脱落であり、身心脱落において神を認識するところ神の中に在り、神によって考えられることを自覚するものとして脱落身心である。否定を通じての肯定、具体的には身心脱落の否定を通じて脱落身心の肯定。両者は同じ働きの二つの面に他ならない。神の有限的に限定せられた限りの神、いわゆるDeus quatenusとしての個体的本質は身心脱落、脱落身心である。田辺は言う、「quatenusとしての限定に身体性を必要とし、これを媒介として思惟がDeusたることを自覚する。」個体的本質は、かくして「身心脱落、脱落身心」として具体化する。(I・207)

田辺いわく、「所謂Deus quatenusなる概念は、ただ弁証法的にのみ理解せられる概念である。そのquatenusとしての限定に身体性を必要とし、之を媒介として思惟がDeusたることを自覚するのであるから、延長と思惟とは弁証法的統一に於いて実体を成立せしめ、絶対否定としての神の欠くあたはざる二つの必然的契機

普遍が個物を限定すると共に、個物が普遍を限定する関係として一者即方法、方法即一者を成り立たしめる所のDeus quatenusである。(I・197-198)田辺は言う、「Deus quatenusは一方Deusであるから、普遍であると同時に、他方quatenusなるによって個体に限定せられたものである。それは普遍にして個体なる所謂具体的普遍でなければならぬ」と。

石沢先生は田辺の「上昇降下としての循環的過流」に着目し、その中心をなすものが個体的本質であって、それはいわば無限者と有限者の接点の如きものであり、循環的過流の回転軸とでもいうべきものである、と言う。方法はそれぞれにかかる意味での回転軸であって、無限多様に変化しながら一者に統べられているのである。(I・199)さらに敷衍して言えば、石沢先生はこうした上昇降下としての循環的過流の回転軸、すなわちDeus quatenusとしてのコナトウス(各々の物は自己の及ぶだけ自己の有に固執するよう努める。)(第三部定理六)要するに「自己維持力」に、エックハルトの「私が神を見る目は神が私を見る目と同じである」という「閃光」を読み取り、更にそこに「啐啄之機」、「啐啄斉(啐啄同時)」という禪語の意味を読み込み、スピノザのいわゆる「神の知的愛」の境界もここに繋がることを強調する。

石沢先生はやがてスピノザのDeus quatenusにおけるコナトウ

となる」と。要するに身心脱落・脱落身心において大機大用を行うるものとして、ひいては「証上に方法あらしむる事事無礙の主體として、個体はDeus quatenusたるのである。(I・211-212)

※ 本文中のローマ数字は以下の『石沢要著作集』の巻数を、アラビア数字はそのページ数を示す。

(いのうえ・かつひと 関西大学教授)

註

- 『石沢要著作集』第一巻「スピノザ研究」
- 『石沢要著作集』第一巻「倫理思想」
- 『石沢要著作集』第三巻「フオイ・フオイの哲学」
- 『石沢要著作集』第四巻「坐禪日記」

編集発行者：木村靖子

製作：創文社事業部

発行年月日：平成二年二月二十五日